

グ
リ
オ
ー
ン



筑摩世界文學大系 79

筑摩世界文學大系

79

ウ　　オ　　ー
グ　リ　ー　ン

吉田健一 訳
伊藤　　整



ブライツヘッドふたたび
事件の核心

筑摩書房

筑摩世界文學大系 79

昭和四十六年十月十五日

初版第一刷發行

ウォーグリーン

訳者

吉田健一
伊藤整

発行者

竹之内静雄

発行所

東京都千代田区神田小川町二ノ八
筑摩書房

郵便番号一〇一―九一
電話東京(二九一)七六五一
振替口座東京四一二三

印刷 三晃印刷 製本 鈴木製本所

落丁本・乱丁本はお取替いたします

(分類) 0397 (製品) 20679 (出版社) 4604

目次

ウォー

ブライツヘッドふたたび

吉田健一 訳 5

グリーン

事件の核心

伊藤 整 訳 195

イーヴリン・ウォー論

E・ウィルソン
土岐恒二 訳 359

グレアム・グリーン

——憐みの解剖

オドネル
中川 敏 訳 366

解説

中川 敏

385

年譜

394

ウ

オ

！

ブライツヘッドふたたび

チャールス・ライダー大尉の信仰と
俗世間の両面に亘る思い出

ローラに

序章 ブライツヘッドふたたび

丘の頂上にあるC中隊の宿营地まで来て私は立ち止り、丁度、早朝の灰色の霧が薄れて全体が眺め渡せるようになった本隊の基地の方を振り返った。我々はその日、そこを出発することになっていた。三カ月前にそこへ来た時はその辺一帯が雪に蔽われていて、それが今は春になって最初の木の芽が出始めていた。私はここに着いた時に、これから先、どんな荒涼たる場面が我々を待っているにしても、これ以上に惨憺な眺めに会おうのを恐れることはないと考えた。そして今、この場所に何一つ楽しい記憶はないと思った。

ここで、私と軍隊というものの間に愛が失わ

れたのだった。

ここが電車の終点になっていて、それでグラスゴーから酔っ払って帰って来る兵隊は、終点に着いて車掌に揺り起されるまで銘々の席で眠り続けることが出来た。終点から基地の門まではかなりの道のりがあって、その四分の一マイル程を行く間に、兵隊は衛兵所の前を通るのに備えて上衣のボタンを掛け、帽子を被り直した。この四分の一マイルを行くうちにコンクリートの道が道端に草が生えている道に変わり、これはグラスゴー市の外郭の果てで、波が海岸に打ち上げて引いて行った後の流木の寄せ集めであり、ここで住宅や映画館が均質に建て込んでいる地帯が終って、ここからその後方にあるものが始

つた。この基地がある場所は最近までは牧場と耕地だった。まだ丘の麓には農場の経営者の家が建っていて、それが我々の大隊本部に当てられていた。曾ては果樹園の石垣の一部だったものをきづたがまだ支え、洗濯をする建物の後に半エーカーに亘って傷め付けられた古木がまだ枯れずにいるのが果樹園の名残りだった。ここは軍隊が入って来る前に取り払われることになっていて、もしもう、一年平和が続いたならば、家も、石垣も、林檎の木もなくなくなっていた筈だった。既に粘土層を切り開いた土手の間にコンクリート道路が半マイルも続き、その両側に溝が基盤の目に掘ってあるのが、市から仕事を請け負った土建会社が下水工事に着手した跡だった。

平和がもう一年続けば、ここも市の郊外の一部になる所だったので、今度は我々が一冬を過した小屋掛けの基地に取り払われる番だった。

この向うに、皆にとって尽きない冗談の種になっている、冬でも廻りの木に半ば隠された市の精神病院があったが、その鉄鉄の柵や立派な門は我々の鉄条網を一層みすばらしく感じさせた。我々は温かな日に狂人達がそのよく掃除された砂利道や綺麗な花壇がある芝生を歩き廻ったり、飛んだり、跳ねたりしているのを眺めることが出来て、彼等は勝ち目がない戦いに見切りを付けた幸福な協力者の群であり、もう何の疑問もなければ、義務もなく、進歩の世紀の正当な遺産相続人としてその遺産で安穩に暮しているのだった。そこを隊を組んで通る時、

兵隊は鉄柵越しに彼等に冗談を言い、「寝床を暖めて置いてくれ。俺も直ぐ行くからな、」などと怒鳴るのだったが、私の中尉付きになったばかりの最も新参の小隊長であるフーパーは、彼等がそうして保護された生活をしているのに文句を付けて、「ヒットラーならあ奴等をガス部屋に入れるのに。我々もヒットラーに見習った方がいい時がありますよ。」と言った。

我々が真冬にここに着いた時は、私は一中隊の強くて希望に満ちた兵隊を連れていた。我々が高原地帯からこの造船業の中心地に移って来る際に、彼等の間に我々が遂に中東に向けて出発することになったのだという噂が広まったのだった。併し日がたつて行つて、我々が雪をど

けて練兵場を作る為の地均しを始めると、彼等の失望が諦めになるのははっきり解った。彼等は魚とじゃが芋のフライを売っている店の匂いを嗅ぎ、工場のサイレンやダンス・ホールの楽隊などの、聞き馴れた平和な音を耳にして、今では休日には街角でごろごろし、将校が現れると、敬礼しなければならなくて、その為に新たに出来た女の前で男を下げることになるのを恐れて姿を隠した。中隊の事務室では軽微罪の報告と特別休暇の申請が殖え、まだ夜が明けたばかりで辺りが薄暗いうちに、一日は仮病を使う兵隊の哀れっぽい声色と、不平があるものの膨れ面と睨むような眼付きで始った。

そしてどの見地からしてもその兵隊達に活を入れるのが役目である筈の私は、自分自身をどう扱ったらいいか解らなくなっていた。ここにいる間に、我々の連隊が編成された時の連隊長は、どこかもう我々と顔を合せることがない所に榮転し、他所の連隊から来た、もっと若い、前の程は人好きがしない大佐が今では連隊長だった。戦争が始った時に志願して一緒に訓練を受けたものは将校集会所に何人も残ってはいなくて、その殆どが色々な理由からいなくなったり、或るものは病気でこを去り、或るものは他の大隊に榮転し、或るものは参謀本部付きになり、或るものは特別任務を志願し、一人は射撃場で死に、一人は軍法会議に掛けられ、彼等の後には召集されたものが来て、今では控え室で絶えずラジオが鳴り、晩の食事の前に多量のビール

が飲まれて、前とは凡てが変っていた。

私はここでまだ三十九にしかならないのに、老いを感じるようになった。晩になると体が強張って疲れが出て来て、基地を離れる気が起らず、或る椅子とか、新聞とかを自分のものと見做す癖が付き、晩の食事の前に必ずジンを三杯飲んで、九時のニュースが終ると直ぐに寝た。又、起床喇叭が鳴る一時間前にいつも目が覚めて、もう寝付かれなかった。

ここで私の最後の恋愛が終った。その終り方は全く平凡なもので、或る日、それも基地で過すこの最後の一日が間近になった頃、私は組み立て式の小屋の中で起床喇叭の前に目を覚まし、同じ小屋にいる他の四人のものが寝息を立てて何か譚言を言ったりしているのを聞きながら、まだ真暗闇なのを見詰めて、その日しなければならぬことを思い浮べていた。武器の操法の課程に二人の軍曹の名を入れただらうか。今日休暇から帰って来ることになっている兵隊の組に対して、又しても最大限度の人数に休暇の延長を認めてやるべきかどうか。フーバーに地図読みの練習に出掛ける志願者達を引率させて大丈夫かどうか。——その暗闇の中でそんなことを考えている時、私はそれまで私のうちで長患いをしていた何ものかがその瞬間に静かに死んだことに気が付いて愕然とした。それは丁度、一人の夫が結婚の四年目に、前は愛していた妻に対して、欲望も、優しい気持も、尊敬ももうないことを急に知ったのに似ていて、一緒にい

るのが嬉しくもなければ、妻を喜ばせようとも思わず、妻がすること、言うこと、考えていることに全く好奇心がなくなり、それをもう一度もとに戻せるという希望もなければ、この失敗に就ての自責の念も湧いて来ないのと同じだった。私はこの結婚の幻滅を初めから終りまで経験していて、私と軍隊とは初めの遮二無二の近寄り方から、法律と義務と習慣の冷い絆しか残っていない現在の状態に至るまで、一切をともしにして来たのだった。私はこの家庭の悲劇でどの場面にも登場して、偶に気まずい思いをするのが段々多くなり、妻の涙が次第に動かす力を失い、仲直りが前程は喜ばしいものでなくなつて、しまいにそういうことが積り積って無関心と冷い批判に変わり、それとともに、悪いのは自分ではなくて自分が曾ては愛した女の方だと確信するようになっていた。私はその声にいつもに似ない響きがあるのを聞き取り、それを予期する癖が付き、妻の眼に空白な反感しかない無理解の色が浮ぶのや、口許が不平そうに冷く引き締るのを認めるのに馴れた。私は夜昼、三年半も同棲した女ならばそうする他ない具合に、妻というものを知った。私はそのだらしないやり口や、その魅力の平凡なからくりや、嫉妬深さや、自分本位の態度や、嘘をついている時の指の神経質な動かし方を知った。この妻は今では一切の美点を失い、私は彼女が一時の愚行で私がもう逃れられない風に結ばれてしまった性に合わない他人であることを認めていた。

それで、我々が発掘するこの日の朝、私は我々の目的地がどこだろうと全く無関心だった。

私は自分の任務をこれから果して行く積りだったが、そのことにただ同意しているだけのことだった。我々に与えられた命令によれば、残っているその日の食糧を背囊に入れて〇九一五時に近くの引き込み線で乗車することになっていて、私にとってはそれだけ解っていれば充分だった。中隊の副隊長は少数の先発隊とともに既に出発して、中隊の軍需品は前の日に梱包を終り、宿営地跡の検査にはフーパーが当ることになっていて、中隊は〇七三〇時に雑糞を小屋の前に積み上げて整列するのだった。我々がカレーの防禦に向うのだと思つて興奮の極みに達した一九四〇年の或る朝以来、こういう移動が何度行われたか解らなかつた。我々は一年に三度か四度はこうして所在地を変えて来たが今度は新任の連隊長が、「防禦」に異常な熱意を示して、我々に軍服と車両から一切の徽章や印を取り去ることまでさせた。「実戦のいい訓練になる、」と連隊長が言つた。「もし行先でこの女どもが一人でも待つていたら、それで機密の漏洩があつたことが解る。」

炊事場の煙が霧の中に消えて行つて、基地は後世になつて考古学者達によつて発掘されでもねられた無数の小道の迷路という形をして横たわつてゐた。

「ポロック隊による発掘は二十世紀の市民奴隷

の社会と、その後に来た蛮族の時代の関連を示すものとして貴重である。我々はそこに、複雑な下水工事や恒久的な道路の建設をする高度の文明に達した社会が、最下級に属する種族に征服されたのを見る。この種族が如何なるものだったかは、女が装身具というものを全く付けず、明かに原始的な禁忌によつて死者が居住地から非常に遠い場所に運ばれて埋葬されたことから察せられ、……」

私は未来の学者達がこんな風に書くのを想像した。そして向き直つて、そこへ来た中隊の曹長に、「フーパー少尉は」と聞いた。

「今朝はまだお目に掛りません。」私が曹長ともう家具が運び去られた中隊の事務室へ行くと、兵営損害帳の記入が終つてから新たにガラス窓が一つ壊れていた。「夜中に風が吹いたんです、」と曹長が言つた（こうして、或は、「工兵の演習です、」ということであろうことの一切が説明された）。

フーパーがやつて来た。彼は顔色の悪い、髪を分けずに額から真直ぐに後に撫で付けている青年で、単調な中部地方の発音で話し、この中隊に来てから二カ月になつてゐた。

兵隊はフーパーを嫌つて、それは彼が自分の任務に就て余りにも無智であるのと、「休め」の時に兵隊を個人的に、「ジョージ、」などと呼んだりするからだつたが、私は主に彼が將校集会所での晩の食事に最初に現れた時の或る出来事の為に、彼に愛情と言つてもいいかも知れないものを感じてゐた。

それは新しい連隊長が来てまだ一週間にならないう頃のことだ、その性格はまだ我々にとつて未知数だった。連隊長は控え室で我々に盛にジンを奢つていて、フーパーに最初に気が付いた時には少しばかり騒々しくなつてゐた。

「あの若い將校は君の所にいるのじゃないかな、ライダー、」と彼は私に言つた。「もう床屋に行つてもいい頭をしている。」

「確かにしています。」と私は答えた。それは本當だった。「早速そうさせます。」

連隊長はもっとジンを飲んで、フーパーを見詰め、「この頃送られて来る將校というのは全くひどいものだ、」と誰にも聞える声で言つた。フーパーはその晩中、連隊長の頭に引つ掛つてゐるようだった。そして食事の後で急に大きな声を出して「私が今までいた連隊で若い將校がそんな髪をしていたら、他の少尉達が寄つてたかつて髪を刈つてやるのに、」と言つた。

誰もそんなことをするのに興味を示さなくて、それが連隊長を一層、刺戟したらしかつた。

「君、」と彼はA中隊にゐる、そういうことが嫌いな一人の少尉の方を向いて言つた。「どこから缺を持つて来てあの若い將校の髪を刈つてやつてくれ給え。」

「それは命令ですか、連隊長。」

「君の上官の望みなんだ。それが命令でなくて何だというんだ。」

「それではそうします。」

という訳で、皆が如何にも間が悪い思いをし
ている中でフーバーが椅子に腰掛け、頭の後か
ら髪が少しばかり申し訳に切り取られた。私は
それが始ると控え室を出て、後でフーバーに最
初の晩にそんな目に会わされたことに就て連隊
長に代つて詫びた。「この連隊では普通あんな
ことはないんだけれど、」と私は言った。

「別に何とも思つてはいませんよ、」とフーバ
ーは答えた。「冗談位、我慢しなきゃ。」

フーバーは軍隊というものに就て何の夢も持
つていなかった。或は少くとも、宇宙全体が彼
にとつては深い霧に包まれているのから区別出
来る特定の夢は彼になかった。彼は強制されて、
兵役を免除される為に彼なりに手を尽した後に、
いやいやながら軍隊に入つたので、彼の言葉に
従えば、「麻疹と同じように」軍隊も辛抱し
ているのだった。フーバーは浪漫主義者ではな
かった。彼は子供の時にルパート王子とともに
クロムウェル側の歩兵を蹴散らしたこともなけ
れば、トロヤのギリシヤ軍の陣地で焚き火に当
つたこともないのだった。私が詩を読んでいる
時でなければ涙を流さなかつた年頃に、——と
いうのは、我々が直ぐに泣き出す子供から一人
前の大人になるまでの間に、我が国の教育制度
が我々に経験させる克己主義と瘦せ我慢の時期
に、——フーバーは幾らでも泣いたが、それは
聖徒クリスピンの日にヘンリー五世がやった演
説の為にでもなければ、テルモピレーに散華し
た勇士達の墓碑銘を読んでもなかった。彼が

学校で習つた歴史には余り戦いのことなど出て
来なくて、その代りに人道主義的な立法とか、
近世の産業上の変革とかに就て細かな事実まで
挙げてあつた。ガリポリ、バラクラヴァ、クイ
ベック、レバント、パノックバーン、ロンスヴ
アル、マラソン、それからアースー王が倒れた
西方での戦いその他、今の私の乾枯らびた無頼
の状態にあつてさえ、その間の年月を越えて、
少年時代と同じ強さと明るさで誓いて来る百に
余るそういう名前は、フーバーにとっては意味
がないものだった。

彼は稀にしか不平を言わなかつた。それでも、
彼自身は凡そ簡単な仕事も安心して任せられな
い人間なのにも拘らず、能率の觀念に取り憑か
れていて、商業の面での彼なりの経験に基いて
軍隊での給与や供給の方法や、「延べ人員」の
用い方に就て、「これが商売なら、とてもこん
なことではやって行けない、」などと言つた。
彼は私が寝付かれなくていらいらしている時
もよく眠つた。

フーバーと一緒に何週間か過すうちに、彼は
私にとつて今日の英國の青年の象徴になつて、
それで誰かが、青年が未来に要求することとか
世界が青年に負っていることとかに就て書いて
いるのを見る毎に、私は青年の代りにフーバー
を置いて、それでもその言い分が通るかどうか
験すのだった。こうして私は起床喇叭が鳴る前
の暗闇の中で、「フーバー大会」、「フーバー・
ホステル」、「国際間のフーバーの協力」、或は、

「フーバーと宗教」などに就て考えることがあ
つて、フーバーという酸をこういう合金の凡て
に用いてその可否を確めることにしていた。

彼が将校養成所を出てここへ来た頃よりも、
現在の彼はどつちかと言へば、もつと軍人らし
くなくなつていた。今朝は、完全装備をした彼
は殆ど人間とは思えなかつた。彼は踊るような
恰好で、氣を付けの姿勢になり、敬礼している
積りで毛糸の手袋を嵌めた片手の掌を額の所に
拡げた。

「曹長、ちょっとフーバー少尉に話したいこと
があるから、……君は一体、どこへ行つていた
んだ。宿营地跡の検査をするように言つたじゃ
ないか。」

「遅れましたか。すみません。装備が大変だつ
たもんで。」

「その為に従卒がいるんじゃないか。」

「ええ、まあ、そうですけれど。しかし私の従
卒も装備しなければならなくて、御存じでしょ
う、あの連中の御機嫌を損じると他の時に仕返
しをされますから。」

「兎に角、宿营地跡の検査に行つてくれ給え。」

「はい、はい。」

「そしてその、はい、はいだけは止めてくれ
よ。」

「すみません。つい出ちゃうんです。」

フーバーが行つてしまつてから、曹長が戻つ
て来た。

「連隊長が坂を登つて来られます、」と彼は言

った。

私は出迎えに行った。

連隊長の小さな赤い口髭の根元に汗が玉に
なっていた。

「跡片付けはもうすんだのか。」

「大体すんでいます。」

「大体じゃ困る。すんでいなきや。」

彼は壊れた窓ガラスに目を留めて、「あれは
兵営損害帳に記入したのか、」と聞いた。

「まだです。」

「まだ。私が見付けなかったらどうなったこと
か。」

彼は私といると落ち着きをなくして、私に対
してこういう態度を取るのも主にその為だった
が、それだからと言って私がそれをよく思ひは
しなかった。

彼は私を小屋の列の後にある、私の中隊と輸
送小隊の境目になっている金網の柵の所まで連
れて行って、これを敏捷に飛び越え、曾ては農
園の畑の境をなしていた、草で蔽われた土手と
空堀の方に向かって行った。彼はそこまで来てス
テッキで、松露を鼻で掘り出す豚のように、草
の中をつつ突き始め、やがて得意そうに叫び声
を上げた。彼は、綺麗好きな兵隊が作りたがる
ごみ溜めの一つを見付けたので、箒の頭が一つ、
ストープの蓋が一つ、錆びて穴が開いたバケツ
が一つ、靴下の片方、及び一塊のパンが空き鏝
や煙草の空き箱とともに雑草の下に捨ててあっ
た。

「これを見給え、」と連隊長が言った。「我々と
交代する連隊にこれじゃひどい印象を与えるこ
とになる。」

「全くです、」と私は答えた。

「話にならない。ここを出る前に全部焼き捨て
るようにしてくれ給え。」

「承知しました。曹長、輸送小隊に行つてブラ
オン大尉に連隊長がこの空堀を掃除して行くよ
うに命令されたと伝えてくれ。」

私は連隊長がこの私の抗議を素直に受け取る
だろうかどうかと思つていて、そうした
ものかどうか決められないのは連隊長の方も同
じだった。彼は暫く空堀の中のごみ溜めをつつ
突いていてから、急に向きを変えて歩いて行っ
てしまった。

「ああいうことをなさるものじゃありません、」
と私がこの中隊に來た時から何かに付けて世話
を焼いてくれている曹長が私に言った。「あれ
はいけません。」

「併しあれは我々が捨てたごみじゃないんだか
ら。」

「そうかも知れませんが、御存じでしょう、幹
部将校の御機嫌を損じると、他の時に仕返しを
されるんですから。」

我々が隊伍を組んで精神病院の前に差し掛っ
た時、鉄柵の向うには二、三人の年取った患者
がいて、何か訳が解らないことを大人しく語り
合つていた。

「又会おうぜ、」とか、「我々ももう直ぐ行くん
だから、」とか、「又の日まで笑顔でね、」とか、
兵隊が彼等に向つて別れの言葉を投げ付けた。
私は先頭の小隊の先に立つて、フーパーと並
んで進んでいた。

「これからどこに行くんでしょうかね。」

「解らない。」

「これは本ものじゃないでしょうか。」

「そうは思わないな。」

「ただの移動でしょうか。」

「そうだろう。」

「皆が今度は本ものだって言っているんです。
私には解りませんがね。併し戦線に行くんじや
なくて、こうして訓練や演習ばかりしているの
は何だか馬鹿げているっていう気がするん
です。」

「心配することはないよ。何れ幾らでも本もの
の経験をする時が来るんだから。」

「いや、そう沢山したいっていうんじゃないん
ですよ。ただ、本当に戦争に行つて来たんだっ
て言える程度にね。」

引き込み線には古ぼけた客車を繋いだ列車が
我々を待っていた。鉄道輸送係の将校が乗車の
監督に當つていて、作業員が雑糞の最後の分を
トラックから貨車に積み込んでいた。我々は三
十分で乗車を完了し、一時間の後に汽車が動き
出した。

私の中隊の小隊長三人と私には客車が一台宛
てがわれて、三人はサンドイッチやチョコレ

トを食べ、煙草を吸い、そして眠った。その中では一人も本を持っていなかった。初めの三、四時間は、彼等は汽車が通る毎に窓から首を出していたが、そのうちにそれもしくなくなった。正午と夕方に生ぬるいココアが大きな容器から我々の水呑みに注がれた。汽車は平たくて単調な、幹線の沿線にあり勝ちな景色の中を南に向ってのろのろと進んで行った。

その日の主な出来事は連隊長の「作戦会議」だった。我々が連隊長の客車に集合すると、連隊長も副官も鉄兜を被って防毒の装備を付けていて、連隊長は先ず我々に、「これは作戦会議なんだ。こういう時は君達もちゃんとした恰好をして来なければならぬ。これが汽車の中だということとは問題じゃない」と言った。私は彼が私達をもう一度、装備を取りに戻らせるのかと思ったが、彼は私達を睨み付けてから、「腰掛けなさい」と次に言った。

「我々が立つ時の宿営地の状態はひどいものだった。どこへ行っても、将校がその責任を果さなかったことが解つて、宿営地をどんな風にして出発するかという程度、連隊付きの将校の能率如何を示すものはないのだ。又それによって連隊とその連隊の指揮官に対する評価も決る。そして、——」とその先のことを彼は本当に言ったのだつたらうか。それとも私が彼の限付きや声に現れている不満をそういう言葉に直して受け取ったのだらうか。どうも、そこまでは言

わずにいたような気がする。「——私は私の職業軍人としての評判を何人かの素人のお蔭で台なしにする積りはない。」

私達は手帳と鉛筆を出して、次の任務が何であるかを聞かされるのを待っていた。相手ももっと気が付く人間だったならば、自分が言ったことが何の印象も与えなかったことが解つた筈で、或はそれが解つたのかも知れなかった。何故なら、それから連隊長が機嫌が悪い学校の先生のような口調で、「私は君達が私に忠実に協力してくれることを求めているだけなんだ。」と言ひ足したからである。

彼は次に紙に書いたものから読み始めた。

「命令。」

「状況。この隊は現在、地点Aから地点Bに向いつつある。我々が通っているのは重要な幹線であるから、敵の爆撃、及び毒ガスによる攻撃を受ける危険がある。」

「目的。私の目的は地点Bに到着することにある。」

「方法。汽車は大体、二十三日十五分に目的地に到着する。……」等々。

仕返しが来たのは連隊長が「担当」という項目の終りに達した時で、それによると、C中隊は一小隊を除いて、汽車が目的地の引き込み線で止つた時に、そこで待っている三台の三トトラックに汽車の荷物を移し、トラックが新し宿営地の連隊の荷物置き場まで荷物を全部運び終るまで仕事を続けること、又、残りの

一小隊は荷物置き場と宿営地の歩哨線の哨戒に当ることになっていた。

「何か質問は。」

「作業員の為にココアの宅配を願えませんか。」

「いかん。他の質問は。」

私が曹長にこの命令を伝えたと、「又、C中隊ですね。」と曹長が言った。そしてそれが私が連隊長の反感を買つたことを責める意味も含まれたものであることは明かだった。

私は小隊長達にも命令を伝えた。

「併しそれじゃ兵隊が可哀そうじゃないですか、」とフーバーが言った。「完全に参つちまいますよ。連隊長はいやな仕事はいつも我々にさせるんですね。」

「君は哨戒をやってくれ給え。」

「はい、はい。併し暗闇の中でどうやって歩哨線を見付けるんですか。」

燈火管制の命令が出てから間もなくして伝令が一人、がらがらを鳴らしながら情なさそうに汽車の廊下を通つてやつて来た。軍曹達の中の洒落ものが、「二回目の食事を予約なさった方、」とフランス語で怒鳴つた。

「我々は敵機に液体の靡爛性ガスを吹き付けられてるんだ」と私は言った。「窓を締めるように。」それから私は、人員に被害はなくて汽車の内部も汚染せず、一部のものに汽車から降りた後に汽車の外部を消毒するように命令したということを手際よく報告書に書いた。それで連隊長は満足したらしくて、もうそれから何

も言つて寄越さなかつた。暗くなつてからは、我々は皆眠つた。

汽車は夜遅く漸く目的地の引き込み線に着いた。我々は防諜と実戦の爲の訓練という見地から駅やプラットホームで汽車から降りないことになつていて、暗闇の中で汽車の踏み台から石炭殻を敷いた線路に飛び降りるので混雑が生じ、何かとものが壊れた。

「土手の下の道路で集合。C中隊は何をしてるんだ、ライダー大尉。」

「はい、漂白剤で手間取つてゐるんです。」

「はい汽車の外部を消毒する為なんです。」

「良心的なのに恐れ入る。もういいから、早く集合するように。」

私の中隊の、まだ半眠りで不機嫌な兵隊は、もうその時は道路で列を作り掛けていた。それから間もなくして、フーパーがその小隊を率いて闇の中に消え、私はトラックを見付けて、兵隊を何列かに分けて汽車から降りし土手の下まで荷物を順繰りに渡して降す仕事に掛らされた。そして少しは意味がある仕事をやらされてゐることで、兵隊も幾分、元氣になった。私は最初の三十分間、その仕事を手伝つて、それから最初に戻つて来たトラックで宿営地からやつて来た副隊長の方へ行つた。

「悪い所じゃありません、」と彼は報告した。

「湖が二つか三つある大きな屋敷で、運がよければ鴨が取れるかも知れないんです。それから

飲み屋が一軒と郵便局がある村があつて、町なつてものほどこまで行つたらあるんですかね。貴方と二人だけの小屋を確保して置きます。」

作業は午前四時までに終つて、私は最後のトラックに乗り、低く垂れてゐる木の枝がトラックの前のガラスに当る曲りくねつた小道を幾つも通つて行つた。その途中のどこかで我々は小道から広い馬車道に入つて行き、やがてそれが二つに分れてゐる空き地に提燈が荷物置き場の位置を示している所に来た。我々はそこでトラックの荷物を降し、星が一つも見えない空から小雨が降り始めた中を漸くのことで我々の宿舎に案内された。

私は従兵に起されるまで眠つて、ぐつたりした気持で床を離れ、黙つたまま服を着けて顔を剃り、小屋の戸口まで出て始めて副隊長に、「ここは何という所なんだ、」と聞いた。

その答えで、それは丁度、誰かがラジオを止めて、それまで何日も、何日も絶え間なく私の耳に凡そ意味がないことを怒鳴り続けていた声が急に途切れたようだった。果てしない沈黙が拡つて、初めはそれが空白だったが、やがてそれまでの騒音に打ちのめされてゐた私の精神が回復するに従つて、それは私が長い間忘れてゐた幾多の無垢な美しい音で満されて行つた。というの、副隊長が言つた名前は私には馴染みのもので、その曾ての強力な魔術が甦り、それを聞いただけで、この何年間かの私の生活に巢

食つていた妖怪どもが追い払われたのだった。

私は自失の状態でも小屋の外に立つた。雨は止んでゐたが、まだ厚い雲が空を蔽つて低く垂れ下つてゐた。静かな朝で、炊事場の煙は鉛色をした空に向つて真直ぐに昇つて行つた。曾ては舗装されてゐて、そのうちに草に蔽われ、今は荷車の行き来で掘り返されて泥になつた小道が、丘の傾斜に沿つて行つて、頂上の辺で見えなくなり、その両側に海鼠板の小屋が乱雑に散らばつていて、そこから皿がかち合うのや、話し声や、口笛や、弥次などの、連隊が又新たに一日を迎えたことを示す音が聞えて来た。その向うと、又その周囲には、人間の手で作られた美しい、私には更に馴染みが深い景色が横たわつてゐた。それはただ一つの曲りくねつて行く谷間に閉された人氣がない場所だった。我々の宿営地はその一つの緩かな傾斜を占めていて、その向うの地面はまだ昔のままの姿で直ぐその地平線を目指して登つて行き、そこ我々がいる所の間に一筋の川が流れてゐた。——それはプライド川と言つて、昔は時々、お茶の時間を過ぎに出掛けて行つた、ここから二マイルばかり先のプライドスプリングスという農園にその水源地があつた。これは川下でアヴォン河に合流する前にかなり大きな川になつて、それがここでは堰き止められて三つの湖を作り、最初のは葦に囲まれた水溜り程度のものだったが、後の二つはもっと大きくて、雲や、岸に生えてゐる榊の大木を映してゐた。ここ森に生えてゐる

のは凡て樫か楠で、樫の木は今、まだ灰色の幹や枝を剥き出しにし、楠は出たばかりの芽で微かに緑の色で刷かれ、これが緑の木の間道や広い芝生と調和するように入念に工夫してあった。

——白い斑がある鹿の群はまだここに住んでゐるのだろうか。——そして眺めが単調にならないように水際にドリリア式の神殿が建ち、湖と湖を結ぶ最後の堰にきつたで蔽われた石の橋が掛つていた。こういうことは凡て今から一世紀半ばかり前に、丁度、今が見頃になるように計画され、施工されたのだった。私が立っている所からは、屋敷は緑の丘の蔭になって見えなかったが、私はそれがライムの木に囲まれて、牝鹿が雑草の中に伏せている恰好をして建っていることをよく知っていた。

フーバーが擦り寄つて来て、誰もが真似をしようにして誰にも真似が出来ない例の敬礼をした。彼は徹夜の哨戒で灰色の顔をしていて、まだ髭を剃っていなかった。

「B中隊と交替しました。今、兵隊を顔を洗わせにやった所です。」

「御苦勞様。」

「屋敷はあの丘の向うなんです。」

「そうなんだ、」と私は言った。

「来週は旅団司令部もそこへ移つて来ます。大変な所ですよ、恐しく豪華版な。今ちょっと中を覗いて来たんです。そして妙なことに、何だかカトリックの礼拝堂のようなものが付いているんですよ。私が行ったら礼拝の最中らしくて、

坊さんと年寄りが一人しきいかなかったけれど、極りが悪かったですよ。貴方なら馴れているでしょうけれど。」フーバーは私が聞いていないのだと思つたようで、どうにかして私の注意を惹こうとして最後に言つた。

「それから玄關の石段の前に大変な噴水があるんです、岩だの、獣の彫刻で出来た、あんなものは貴方だつて見たことがないと思ひますよ。」「いや、あるよ、フーバー。私は前にここに来たことがあるんだ。」

その言葉は私が入れられている牢獄の壁に鈎して、更に豊かにされて返つて来るようだった。「それじゃ、皆もう御存じの訳ですね。これから顔を洗ひに行つて来ます。」

私は前にここに来たことがあつて、このことならば皆知っていた。

第一部 曾てアルカディアに

第一章

「私は前にここに来たことがある、」と私は言つた。確かに私は前にここに来たことがあつて、最初はセバスチアンと一緒に今から二十年以上も前に、空には雲が一つもない六月の或る日、牧場の空堀がしもつけの花の白で埋められ、空気が夏の色々な匂いで重くなっている時に来たのだった。その日は素晴らしくて、それからここに何度も来たことがあつたが、最後にここに戻つて来た現在、私の胸に甦つたのは、その最初の、セバスチアンと来た時のことだった。

その日も、私は自分がどこへ行くのか知らずにここへ連れて来られたのだった。それは夏休みになる前の、ボートレースの季節で、その頃の、水が押し寄せて来るのが余り早かつた為に、今ではその昔、海底に沈んだりヨネッスの王国と同様に、全く跡形もなく消え失せてしまったその頃のオックスフォードは、まだ水彩画の色をした町だった。その道幅が広い、ひっそりした街路には、ニューマンの時代と同じような恰好をした学生が歩いていたり、立ち話をしたりして、秋の霧や、灰色をした春や、――

丁度その日もそうだったが、——栗の花が咲いて町の建物の切妻や円屋根の上を教会の鐘の澄んだ音が響いて来る、極めて稀にしかない晴れ渡った夏の日は、何世紀にも亘ってここに人々の青春が過ぎたことから生じる柔かな空気に息づいていた。この僧院の中にいるのに似た静寂が我々の笑い声を反響させて、それを辺りの雑音を越えてどこまでも明るく伝えて行くのだった。そこにこのポートレーズの季節になると何百人もの女の群が丸石を敷いた道や石段で囀り合い、服の袖や裾を翻し、見物する名所と快楽を求めて、炭酸で割ったレモンを添えた赤葡萄酒を飲んだり、胡瓜のサンドイッチを食べたりして、騒々しく侵入して来た。又、河を舟で漕ぎ廻され、各コレッジの屋形船に詰め込まれ、「アイシス」紙の紙上やユニオン・クラブで何とも奇妙で不愉快な、ギルバートとサリヴァンの歌劇風の冗談で、そして各コレッジの礼拝堂では変った効果の合唱で、迎えられた。この侵入者の群は町のどんな片隅にもその跡を残して行つて、私のコレッジには跡ではなしに、この騒ぎの中心になるべきものの一つが置かれることになつていた。コレッジで女達の為に舞踏会が開かれるのだった。私の部屋が面しているコレッジの広場に床が敷かれ、天幕が張られて、門番の家は鉢植えの椰子や躑躅で取り巻かれ、それよりもっとひどいのは、私の部屋の直ぐ上に住んでいる教授が、これは何か博物学の方をやっている恐しく小さな男だったが、彼がそ

の住居の幾部屋かを女達の休憩所に宛てることを承諾して、この冒瀆を公告する印刷した紙が、私の部屋の入り口の直ぐ脇に貼り出してあった。私が使っている校僕のラントはこの騒ぎを誰よりも不愉快に思っていた。

「御婦人のお客がない方はこれから四、五日の間、なるべく外で食事をなさるようになっていくことです。」とラントは情ない顔付きをして言つた。「今日の昼のお食事はどうなさいます。」

「出掛けるよ、ラント。」

「我々が息抜き出来るようになっていくんですがね。何が息抜きですかね、これから私は御婦人の休憩室に置くビン差しを買いに行かなければならないんですよ。何故ダンスなんてしなきゃならないんでしょうね。どうしても解らない。以前はポートレーズの季節に舞踏会なんてありませんでした。記念祭は、あれはもう夏休みになつてからですから違います。併しポートレーズの時にね、どうしてお茶と河で舟に乗るので満足出来ないんでしょう。これも皆、戦争のお蔭ですね。あの戦争がなければ、こんなことにはならなかったんです。」というのは、これは一九二三年のことで、他の多くのものにとつてと同様に、ラントの考えでも、第一次世界大戦が始まる前の時代はもう二度と戻つて来ないのだつた。「晩に葡萄酒が出るのか、」とラントはいつものように戸口から半分だけ部屋の中に体を入れた恰好でこぼすのを続けた。「或は昼の食事」に一人か二人お客があるとかいうのは構いま

せんよ。併しダンスというのはどういうことです。皆これは、戦争から帰つて来た人達が始めたことなんです。もう年を取つていて、何も知らないのに覚えようとしなかったんです。それでこんなことになつてしまつたんですよ。

そして今じゃマソニック会館に町のものと踊りに行く人達まであるんです。併しあれは大学の方ではうって置きませんよ。それで、……ああセバスチャンさんがいらつしやいました。ビン差しを買いに行かなきゃならないのに、こんな所でお喋りなんかしていられませんや。」

セバスチャンが入つて来た。——薄い風色のフランネルの服に白い縮緬のワイシャツ、シャルヴェ製のネクタイ、これは私のもので、郵便切手の模様のネクタイだったが、——そういう出で立ちで、「チャールス、このコレッジじゃ何が始るんだね。曲馬団でも来るのかい。象の他はお膳立てがすっかり揃つてるようじゃないか。併しこの町全体がどうかしてしまつていらしい。昨晩なんか、どこへ行つても女で一杯なんだ。それで、君を連れ出しに来たんだ。こんな所にいたら何が起るか解りやしない。車と、薔が一籠と、それからシャトー・ペラゲーの白葡萄酒が一本ある。——君がまだ飲んだことがないものだから、飲んだことがあるような顔をして駄目だよ。薔と一緒にだ天国の味がする。」

「それで、どこに行くの。」

「友達の所に。」

「何という。」

「ホーキンスっていう人の所。途中で何か買いたくもがしたくなるかも知れないから、お金を少し持って来て。車はハードカッスルっていう友達のものなんだ。私は余り運転するのが上手じゃないから、もし衝突でもして死んでしまったら車の残骸をそのハードカッスルっていうのに返して。」

門の向うの、前は門番の家だった温室の庭の先に二人乗りのモリス・カウリーのオープンが一台止っていて、ハンドルの後にセバスチアンがどこにでも持って歩く熊の玩具が納っていた。私達はこれを私達の間に置いて、——「熊公が酔って吐かないように気を付けて、」とセバスチアンが言った、——そうして出発した。セント・メリー教会の鐘が九時を打っていた。私達は本通りの右側をゆっくり自転車を走らせて来た、黒い麦藁帽を被って白い髯を生やした坊さんと危く衝突するのを免れて、カーファックスの四つ辻を過ぎ、駅の前を通って間もなくボットレー街道に出て、そこはもう田舎だった。その頃は町から直ぐに田舎に出ることが出来たのである。

「一日が始ったばかりなんだね、」とセバスチアンが言った。「女達は下に降りて来る前に何をするのか、それをまだやっているらしい。懶け癖が付くともういうことになる。これで無事に脱出することが出来た訳だ。ハードカッスル様々だね。」

「そのハードカッスルっていうのが誰だろうとね。」

「あれも私達と一緒に来る積りでいたんだけれど、やはり懶け癖が付いてしまった組だね。それに、十時と言ってやったのに来ないんだからね。ハードカッスルってのは私のコレッジにいる非常に陰気な男だね。二重生活を送っているんだ。少くとも、そうに違いはないと思うんでね、夜昼、あんなハードカッスルであるっていうのは無理じゃないかしら。死んじまうよ、そんなことをしていたら。私の父を知っているっていうんだけれど、そんなことがある訳がないよ。」

「何故。」

「だって、私の父っていうのは誰にも相手にされない人間なんだもの。君は知らなかったの。」
「私達が二人とも歌が歌えないのは残念だね。」
私達はスウィンドンで街道を離れ、日が高く昇った時には石の塀や切り石積み家の間を通っていた。十一時頃、セバスチアンは何の前触れもなしに車を荷車の行き来がやつの狭い道に入れて、止めた。もう蔭が欲しくなる程暑くて、羊が芝を食べに来る小さな丘に榆の木が何本か枝を伸ばしている下で、私達は苺と一緒に白葡萄酒を飲み、この取り合はセバスチアンが言った通り、何とも甘美なものだった。そして私達は太いトルコの巻き煙草に火を付けて仰けに寝転り、セバスチアンは私達の上に重なっている榆の木の葉を、私はセバスチアンの横顔を見詰めていた。煙草の青味掛った灰色の煙が

木の葉の青味掛った緑色の影に向って真直ぐに昇って行き、煙草の匂いが私達の廻りに満ちている夏の幾つもの匂いと混じり、黄金色をした葡萄酒の酔いが私達を芝かほんの僅かばかり浮き上らせて、宙に私達を支えているようだった。

「ここは金の甕を埋めるのに丁度いい所だ、」とセバスチアンが言った。「私は私が幸福な思いをした場所毎に何か貴重なものを埋めて、そして私が年を取って醜くてもじめな人間になつてからそこへ戻って来てそれを掘り出しては、昔を回顧したいんだ。」

それは私が入学して三学期目のことだったが、私はオックスフォードでの私の生活を、最初にセバスチアンに会った時から始つたものと考えたくて、それは前の学期の半ばに偶然に起つた出来事だった。二人は違つたコレッジにいて、それまでいた学校も違い、もしセバスチアンが或る晩、私のコレッジで酔つ払い、そして私がコレッジの広場に面した一階の幾間かの部屋に住んでいなかったならば、大学を卒業するまでセバスチアンに会わずにいたかも知れなかった。そういう所に住んでいることの危険に就て、私は従兄のジャスパーに注意されていた。この従兄は私が大学に入学した時に、私にそういう細かな注意を与えてくれた唯一の人間で、私の父はその種類のことを一切言わなかった。それまでもそうだったが、その時も父は私と真面目